

津城・城下町探検



享保期 (1716~1736) 津城下図 [部分]

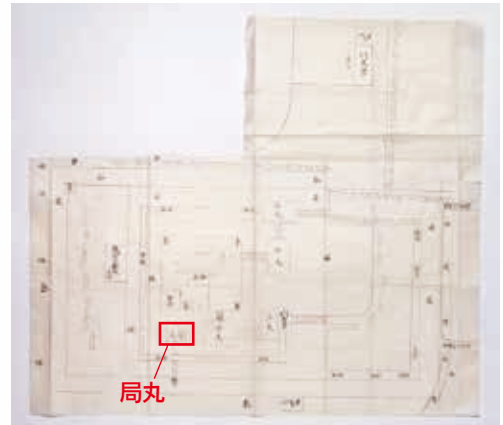
《津城跡は平成 17 年に県史跡に指定されました》
《平成 29 年に続日本 100 名城に選定されました》

津城の成り立ち

世に有名な戦国武将・織田信長が天下統一を目指して伊勢の国に侵攻するのに伴い、伊勢上野城(津市河芸町上野)に本拠を構えていた弟の織田信包は、低湿地であった安濃川下流のデルタ地帯に新たに城を築きます。天正8年(1580)年に完成したこの城が津城のルーツとなったものです。

ここは、北を安濃川、南を岩田川の二つ川に挟まれた場所で、敵からの防御に優れた場所に城を築いたといえます。

城の設計図である「縄張図」や、当時の状況がわかるものは今は残っていませんが、江戸時代に描かれた天正期(1580年頃)の絵図は、現在の津城石垣に近い描写や、江戸時代以降の津城には存在しない「局丸」などが描かれ、津城の歴史を探る貴重な資料となっています。



天正期津城古図(樋田清砂氏旧蔵資料)

富田氏の治世

織田信包が去った後の津には富田氏が入ります。

富田知信・信高の親子二代にわたる津城での治世は関ヶ原の戦いを挟んだ約20年間に及び、慶長13年(1608)に藤堂高虎が津の城主となるまで続きました。

富田氏時代の津城の出来事は、関ヶ原の戦いの前哨戦で、毛利秀元率いる30,000余りの西軍の大軍に包囲された「安濃津城籠城戦」が有名です。1,700程度と言われる城兵の八割近くは津町の義勇兵で、富田氏家臣団だけでなく町民も籠城して戦った総力戦でした。

この時、徳川家康に味方していた富田信高は、「会津攻め」で上杉氏討伐のために津城におらず、若武者緋威(ひおどし)の具足に兜の緒を締めて勇敢に戦ったといわれる信高夫人(宇喜多忠家の娘)の武勇伝が残っています。大軍相手に落城することなく、和睦して開城した信高は、一身田の専修寺から高野山に入り、その後の関ヶ原の戦いの東軍勝利を受けて敗走した西軍に替わり津城に復帰します。しかし、この戦で津町のほとんどが焼け、町は壊滅的な打撃を受けました。

藤堂高虎の入府

慶長13年に徳川家康の命により藤堂高虎が伊予国今治から伊勢・伊賀の領主としてこの地に入ります。

幕府が開かれて5年が過ぎたこの頃も、大坂には依然として大きな力を持った豊臣家が続いており、幕府の支配が確立・安定していたとはいえません。

家康は、豊臣方の監視の役割を担わせるため、高虎をその最前線に配置しました。外様大名でありながら、将軍家康からの厚い信望を得た高虎は、20万石の石高を持つ大名として両国を統治することになります。



藤堂高虎像(部分)(四天王寺所蔵)

高虎による城の整備

慶長16年(1611)になり、幕府の命令による各地の城の修理改築を行ってきた高虎が、自分の城である津城と伊賀上野城の改修を行います。津城は、単に城の修理だけではなく、城下町を含めた新たな津の町の建設となるものでした。

高虎は、本丸を東と北に拡充して高い石垣を築き、北側石垣の両端(丑寅・戌亥の方角)に三重櫓を新たに設け、本丸の周囲を櫓と多聞櫓で囲んだ戦略性の高い城としました。また、東西の内堀の中に東之丸と西之丸の郭(くるわ)を設け、本丸への出入口となる場所には柱や扉を鉄板で覆った鉄門(くろがねもん)を設けています。内堀は広く、その外側の二之丸には役所や重臣の屋敷を、更にその外周には外堀を巡らせる構造としました。

城下町は、それまで海岸沿いを通っていた参宮街道を城下に引き入れて東側の外堀に沿うように城下を通し、往来する人々の流れを作り出し、城下町であるとともに宿場町としての整備を進めて町の活性化を図りました。



寛永期津城下絵図(津市所蔵)

津城の特徴 ～堀と石垣～

津城の最大の特徴は、幅の広い内堀と本丸北側の石垣に代表される直線的な稜線を持った石垣です。

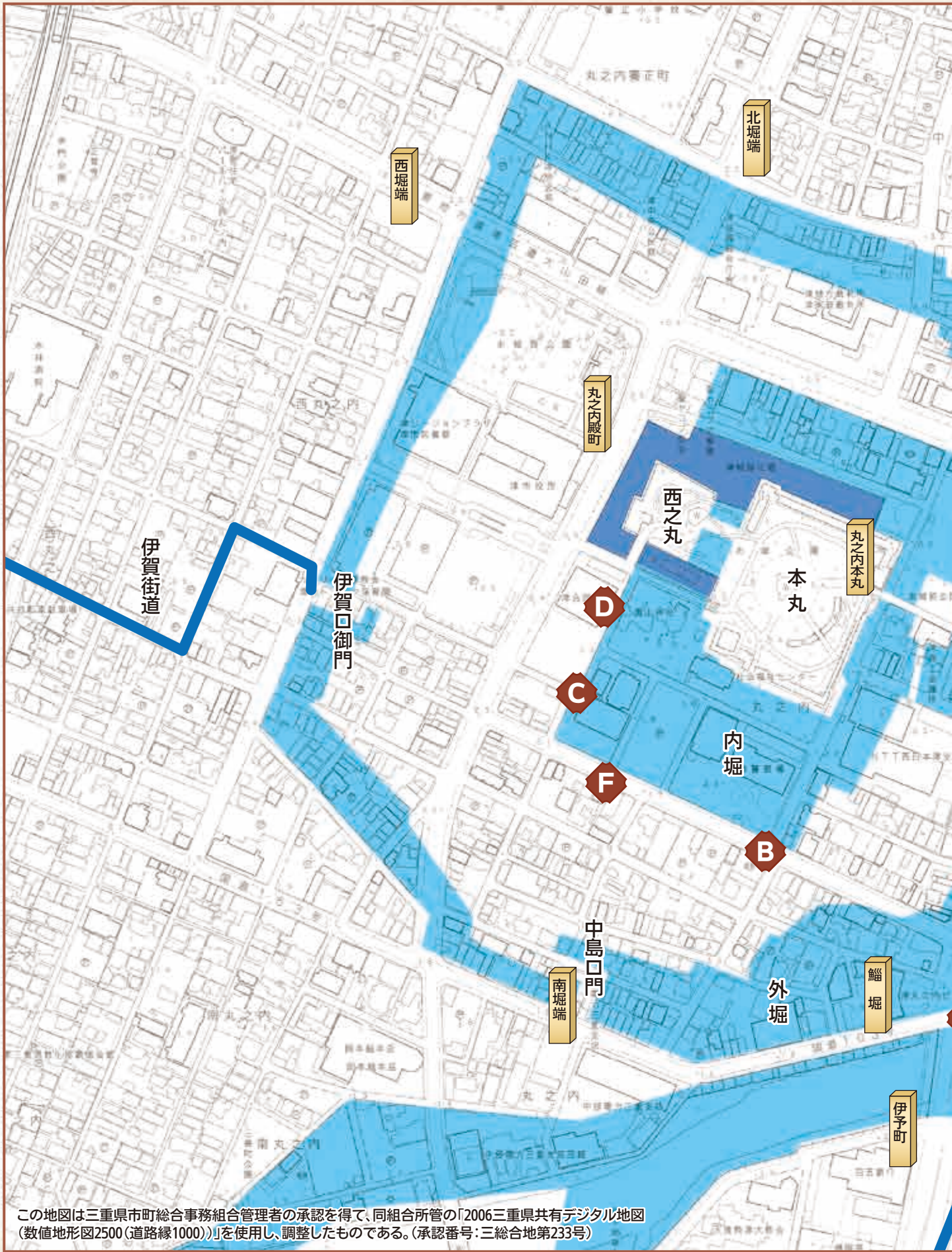
これは高虎の城づくりの特徴と言えるもので、石垣の上に建つ白壁の櫓が堀の水面に映える姿は、まさしく「水城」と言えます。今は北側にわずかに内堀が残るのみですが、かつて本丸を取り囲んでいたその規模は、最も広い南側(今の津警察署付近)で100mほどの幅がありました。

津城を特徴づける堀は、たいへん広い幅を持って本丸を囲む内堀と、その外側の二之丸の周囲を巡る外堀の二重構造に

なっています。まるで「回」の字のように、本丸を中心として巡らされていました。更にその外側には「天然の堀」ともいえる安濃川と岩田川が城の北と南を流れています。津城は、安濃川下流域で海に近い場所にある地理的環境を利用し、人工的な二重の堀に加え、川も城の防御施設として取り込んだ高虎の巧みな築城術が見られます。特に、南側の岩田川と外堀を繋ぎ、満潮時には海水も入るようにしたところは「鯰堀」と呼ばれ、海魚が堀の水面を跳ねる姿をとらえた名前となっています。



本丸北側の高石垣と内堀



この地図は三重県市町総合事務組合管理者の承認を得て、同組合所管の「2006三重県共有デジタル地図 (数値地形図2500 (道路縁1000))」を使用し、調整したものである。(承認番号:三総合地第233号)

津城周辺散策マップ



津城の石垣探訪

石垣はその構築方法によって時期差があります。

津城の天守台にはやや古い築造を示す石積みが残りますが、基本的には「打込接(うちこみはぎ)」と呼ばれる接合面を打ち欠いて石材同士の接点を増やし、空いた所に小石(間詰石)を込めます。石垣の隅部分には「算木積(さんぎづみ)」と呼ばれる長方形の石材の長辺と短辺を交互に組み合わせて強度を持たせた積み方が用いられています。

また、個々の石を近くで見ると様々な「刻印」が発見できますので探してみてください。



本丸天守台の石垣



本丸南石垣の拡張



丑寅櫓石垣の算木積



石材に残るノミの痕跡



西之丸と埋立部分の石垣の違い

左:布積(西之丸)
右:谷積(埋立部分)



様々な刻印

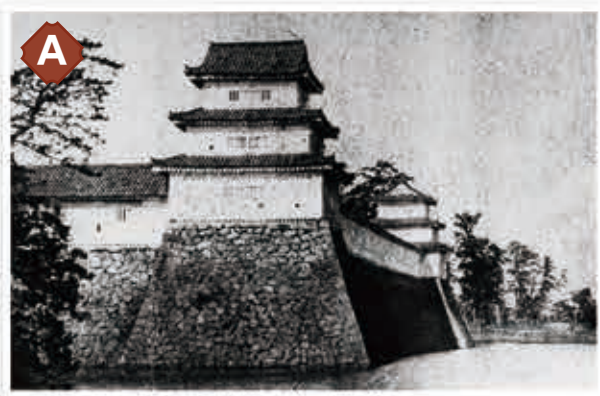


【参考】発掘された内堀の石垣

平成 20 年に市街地中心部のビル建設に先立ち発掘調査が行われ、内堀の外側の石垣が見つかりました。

本丸石垣のような整った四角い切石だけではなく、大小様々な割石が使われています。

いにしへの“津城・城下町”写真館



丑寅櫓と戌亥櫓(明治時代初期)



内堀と天守台・西之丸(明治時代)



内堀と本丸石垣(犬走りが確認できる)



本丸と天守台(明治時代後期)



広い内堀が残る様子(昭和11年頃)



埋め立てられた内堀と天守台(昭和32年)



「大門」名称のもとになった津観音寺の山門



旧宿屋町界限(大正時代)



